飛鳥の宮処とカムナビ山

井上さやか

一　はじめに

『万葉集』には、「明日香」のカムナビ山を詠んだ歌がある。このカムナビ山について、現在は岸俊男氏が提唱した橘寺南の「ミハ山」説が通説となっているといえる。さらに、同論文中では、壬申の乱平定後に「都」を詠んだ歌（19四二六〇、四二六一）が、天武天皇の飛鳥浄御原宮ではなく藤原京を表現したとも言及され、こちらも有力視されている。

ただし、当該論文の初出は昭和四六年であり、飛鳥をめぐる考古学的成果がその後目覚ましい発展をみせたことは周知のとおりである。ならば、そうしたその後の知見を踏まえた上で、再検討してみる必要もあるのではないだろうか。

そこで本稿では、飛鳥の宮処やカムナビに関する従来説を再検討し、それぞれの論拠について検証することで、当館が目指す学際的な古代文学研究の問題点と可能性について考えてみたい。

二　従来説の検討

飛鳥のカムナビが詠まれている歌には、次のような例がある。

①　登神岳山部宿祢赤人作歌一首　并短歌

三諸乃　神名備山尓　五百枝刺　繁生有　都賀乃樹乃
弥継嗣尓　玉葛　絶事無　在管裳　不止将通　明日香能
舊京師者　山高三　河登保志呂之　春日者　山四見容之
秋夜者　河四清之　旦雲二　多頭羽乱　夕霧丹　河津者驟
毎見　哭耳所泣　古思者　（3三二四）

反歌

明日香河　川余藤不去　立霧乃　念應過　孤悲尓不有國
（3三二五）

②　三諸之　神奈備山従……登能陰……雨者落来奴　雨霧相
風左倍吹奴　大口乃　真神之原従　思管　還尓之人
家尓到伎也　（13三二六八）

反歌

還尓之　人乎念等　野干玉之　彼夜者吾毛　宿毛寐金手寸
右二首　（13三二六九）

これらの歌にある「三諸乃（みもろの）　神名備山（かむなびやま）」について、明日香や真神原とともに詠まれていることから、三輪山ではなく飛鳥の地のカムナビ山を指すことは諸註釈書で認められている。ただし、その比定地については諸説がある。

では、これまでにどのような説が提示されてきたのか、次に挙げておきたい。

（A）雷丘説

橘千蔭『萬葉集略解』（寛政八〈一七九六〉年）など

（B）甘樫丘説

折口信夫「万葉集辞典」（『折口信夫全集』第六巻、一九六六・四／中央公論社）

直木孝次郎「甘橿丘の政治と宗教」（『飛鳥　その光と影』平成二〈一九九〇〉・六／吉川弘文館）

（C）ミハ山説

岸俊男「万葉歌の歴史的背景」（『文学』三九―九号、昭和四六〈一九七一〉・九）

西宮一民「飛鳥の神なび」（『美夫君志』二〇号、昭和五一〈一九七六〉・七）など

（D）岡寺山説

伊藤高雄「岡・島ノ荘―民俗空間の基層―」（『飛鳥の祭りと伝承―古典と民俗学叢書12―』平成元〈一九八九〉・二／桜楓社）

（E）天神山説

菊地義裕「飛鳥―神々の聖地―」（『飛鳥の祭りと伝承―古典と民俗学叢書12―』平成元〈一九八九〉・二／桜楓社）

（F）南淵山説

桜井満「飛鳥の神奈備山」（『美夫君志』四一号、一九九〇年）

おおよそ、以上六つの説がある。以下、順に検討してみたい。

【（A）説について】

古くは（A）説が有力であったが、近年の発掘調査によって舒明天皇から天武・持統天皇までの四期に亘る飛鳥宮跡が大字岡から検出されている現在では、この説を採る者は皆無である。現在ほぼ通説となっているのが（C）説であり、（B）（D）（E）（F）の反論も提出されたが、その後一般化したとは言い難い。

【（B）説について】

旧論では、岸説でも取り上げられていた次の歌に拠り、（B）甘樫丘説を再評価した。[1] しかし、現在はそれも撤回しなければならないかと考えている。

③　詠二鳴鹿一一首　并短歌

三諸之　神邊山尓　立向　三垣乃山尓　秋芽子之　妻巻六跡
朝月夜　明巻鴦視　足日木乃　山響令動　喚立鳴毛
（9一七六一）

反歌

明日之夕　不相有八方　足日木乃　山彦令動　呼立哭毛

右件歌或云柿本朝臣人麻呂作　（9一七六二）

①～③の歌に拠れば、ミモロノカムナビヤマとは明日香周辺にあり真神原から見える神聖な山であったということになり、さらに、カムナビヤマやカムナビノミモロノヤマなど類似する表現を含めてみてみると、「帯にせる明日香の川の」（13三二二七、13三二六六）といった表現を伴う例が見出されることから、ミモロノカムナビヤマが明日香川沿いの地域にあったことは疑い得ない。③にあるように、そのミモロノカムナビヤマに「立向三垣乃山（たちむかふみかきのやま）」と表現された山もまた明日香村周辺の山とみられるが、ミカキ山という固有名称は史料に見出せず、ミモロノカムナビヤマがどこに比定されるかによって比定地は異なるといえる。そこでミカキを御垣の意と捉え、明日香地域を〝垣内〟のように認識する蓋然性から、（B）甘樫丘説を採り、八釣・小原の集落を含む香具山から続く山並みを「立向三垣乃山（たちむかふみかきのやま）」と想定した。

しかしながら、（B）甘樫丘説は、その頂上付近から和銅銭とともに陶製骨壺が出土していることが指摘されてもおり、問題は残る。それでも、直木孝次郎氏は、軍事的にも重要な丘であり、「盟神探湯（くがたち）」をする神聖な場所でもあったこと、前述の歌の表現に合致する立地条件であること、「檀」が神聖な植物であったこと、などから総合的にこれを再評価した。[2]

『万葉集』より時代が降るが、諸説が取り上げるように、平安時代の文献上では飛鳥のカムナビが次のように描かれている。

己丑（十日）、大和国高市郡賀美郷甘南備山飛鳥社、遷同郡同郷鳥形山、依神託宣也。

（『日本紀略』淳和天皇天長六（八二九）年三月）

つまり、ここでは、飛鳥のカムナビ山は「賀美郷」に位置し、「飛鳥社」が建っていたこと、このときに託宣によって同郡同郷の「鳥形山」に遷座したこと、が記されている。「飛鳥社」は現在の飛鳥坐神社であるとされており、現在の鎮座地が「鳥形山」であると解されている。

では、遷座前の「甘南備山」はどこかといえば、これに遡る明確な記事は現存せず、不詳としか言いようがない。しかし、この記事

こそが、古代飛鳥のカムナビ山に繋がるヒントとされている。

「賀美郷」とは、『和名抄』にみえる大和国高市郡内の七郷のうちの一つである。他の六郷との関係から、この郷の範囲は現在の明日香村の中の飛鳥川流域に相当することがうかがえる。

ただ、甘橿丘については次のような記事もある。

故諸氏姓人等、沐浴斉戒、各為盟神探湯。則於味橿丘之辞禍戸碑、坐探湯瓮、而引諸人令赴曰、得実則全。偽者必害。

（『日本書紀』允恭天皇四年九月）

また、『延喜式』によれば、「甘樫坐神社」に祭られた神は、飛鳥坐神社の祭神とは区別されている。

甘樫坐神社四座［並大。月次相嘗新嘗］（『延喜式』神名帳）

同じ『日本書紀』には「飛鳥四社」ともあり、これが何を表すのかという問題もある。

癸卯（五日）、奉幣於居紀伊国々懸神・飛鳥四社・住吉大神。

（『日本書紀』朱鳥元（六八六）年七月）

同じく『延喜式』には「飛鳥坐神社四座」とあって、『日本書紀』の「飛鳥四社」はこれに相当する「飛鳥神社」であるとも、[3]「飛鳥坐神社・飛鳥山口坐神社・飛鳥川上坐宇須多伎比売神社・加夜奈留美命神社」であるともされている。[4]

さらにいえば、近年発掘調査が行われ、七世紀代の活発な土地利用の状況が明らかとなり、建物跡などは『日本書紀』記載の蘇我氏の邸宅と関連する施設の可能性が高まったとも指摘された。[5] 直木氏は、だからこそタブーを犯す蘇我氏を見過ごしにできず、乙巳の変で粛正されたのではないかとみる。

古代の一定時期における甘橿丘の神聖性を否定はしないが、『日本略記』にみえる「飛鳥社」があった「甘南備山」とは異なるとみる方が穏当ではないかと考える。

【（C）説について】

では次に、有力視されている（C）ミハ山説の論拠について確認しておきたい。

甘南備山については、あるいはいま雷丘と推定されている小丘とも、また甘樫丘に比定されている丘陵とも考えられているが、前者は雷丘であるか否かは別として、神名火山とみるにはあまりにも低く、また後者の頂上付近からは和銅銭とともに陶製

骨壺が出土している点などから、いずれもなお疑わしい。ところが私は最近明日香村の地籍図を検しているうち、中ツ道の南への延長線がちょうど橘寺のところで山につきあたる地点に「ミハ山」（神山）のあることに気づいた。

（筆者注：②の「三諸之　神奈備山従　登能陰雨者落来奴」について）たとえば香具山の南あたりから見るとき、南から気象が変化してきて、その前後にあたる真神原を通って行く人の安否を気遣うということは、よく実情に適合するように思う。また「三諸の　神辺山に　立ち向ふ　三垣の山に……」（巻九―一七六一）とある「三垣の山」を垣のような山と解して、「ミハ山」に南面すれば、その背後にそびえる山々がちょうどそれにあうように考えられる。

（中略）

ところで先の反歌（筆者注：13三二三一）によれば、神名火山の近くには離宮がなければならない。長歌にもあるように、奈良から吉野に中ツ道を通って行くとき、そこで一泊したのであるが、奈良時代になお飛鳥に存した宮としては小治田宮と嶋宮が記録にみえる。

（中略）

吉野に至るには大海人皇子の先例を考えても、一泊した離宮地を嶋宮とみるのが正しいのではなかろうか。（中略）とすれば、飛鳥の神名火山を嶋宮に近い「ミハ山」に比定することはあながち荒唐無稽の説ではなかろう。[6]

まずは、（A）説を「神名火山とみるにはあまにりにも低」いことから否定し、（B）説については「頂上付近からは和銅銭とともに陶製骨壺が出土している点などから」疑わしいとする。その上で展開された根拠をまとめてみると、

（1）明日香村の地籍図において「中ツ道の南への延長線」にあたる地点に「ミハ山」という地名がみられること

（2）「ミハ山」を「神山」と理解すること

（3）南のミハ山辺りから気象が変化してきて雨が降るということ

（4）この背後の山々が垣のような山（「三垣の山」）と考えられること

（5）「嶋宮」に近い山であること

から、「あながち荒唐無稽の説ではなかろう」と結論している。

（A）説を否定する根拠となった山の高低は、カムナビ山の絶対条件とはいえないのではないか。古代において、神が宿る、神聖さを帯びる山とみなされるのに、どの程度の標高が条件となったかは不明である。

たとえば、代表的なカムナビ山といえる三輪山は、その山容から

神聖視されたという指摘はあるが、高さへのこだわりがあるわけではないだろう。標高でいえば、連なる山々の方がより高い。

また、唯一「天の」と冠される香具山にしても、大和三山（畝傍山・耳成山・香具山）ではもっとも標高の低い山であり、三輪山のような三角錐の美しく特徴的な山容も有していない。これがカムナビとは称されないことから考えて、カムナビ山と「天の香具山」とは、成立時期もしくは背景となる信仰が異なることを物語っていると考えられるが、記紀神話や舒明天皇の国見歌（一二）における重要な位置付けからみて、それらの形成された時期と重ね合わせて考えるべき聖山といえるだろう。

ただ、三輪山も香具山も、纒向遺跡や藤原宮跡からみて「東」の山であることは注意される。カグヤマは輝く山とも理解でき、太陽の昇る東の山の名として相応しい。三山の中でもっとも標高が低くても「天の」と称されることも、東方の山々に連なる端山であることに拠る可能性が高い。

むろん、筆者も（A）説を採る立場にはない。しかし、それは山の高低などではなく、飛鳥浄御原宮との位置関係と、二〇〇五年の奈良文化財研究所による「雷丘第一三九次調査」において、七世紀代とみられる小型石室が検出されたこと、中世に山城が築かれた際に削平された部分が多いが、五世紀後半から六世紀前半には丘の上に古墳群が存在した可能性もあること、などに拠る。(7)

では次に、（C）説の根拠となっている（1）～（5）についてみてみたい。最大の根拠は、（1）明日香村の地籍図において「中ツ道の南への延長線」にあたる地点に「ミハ山」という地名がみられることであったが、この地籍図とはあくまで近現代のものである。その地名がどの程度の時代まで遡り得るのか、という疑問がぬぐいきれない。

歴代の宮号とその比定地などを参考に、当時アスカと呼ばれ認識されていた地域を考えるならば、明日香川東岸の現在の明日香村大字飛鳥・大字岡を中心としたあたりに限られていたとみられる。(8) 橘寺以南は、古代においても橘という別の集落として認識されていたようであり、(9) そのさらに南方の山を「飛鳥の」カムナビ山と認識することが果たして自然だったのかどうか、疑問である。

さらに（1）が、「中ツ道の南への延長線」にあたる地点を根拠としたことにも問題があるのではないだろうか。近年の発掘調査によれば、飛鳥の道路跡は、大字岡の飛鳥宮跡から大字川原の南を通り、下ツ道にかけて東西に整備されていたことがわかっている。(10) こうした状況をふまえると「中ツ道の南への延長線」という根拠があまり意味をなさないように思われるのである。

建物に南北軸が意識されるのは推古朝以降であるといわれるが、道造りにおいて南北の直線が重視されるのは藤原京以降のことといえ、飛鳥時代はむしろ東西に延びる道が主だったのではないか。ま

た、三輪山や二上山などを対象とした一定の信仰形態において、太陽が昇り沈む東西軸が重視されることも周知のとおりである。

奈良時代の歌に詠まれたカムナビ山と前時代の信仰対象であったカムナビ山とを同一視してよいとは思わないが、少なくとも飛鳥のカムナビ山を見出す根拠として、南北に道を延長する必然性は感じられないといえよう。

そもそも、直木孝次郎氏や桜井満氏が指摘したとおり、（2）の「ミハ山」を「神山」と解すること自体に無理がある。「三輪」や「神」はあくまで「ミワ」であって、「ミハ」とは区別される言葉である。[11]

（3）の南から雲が広がり雨が降る、という言及も、明日香村に日常的に勤務する者として、あまり実感がない。やはり、西の空から黒雲が押し寄せてきて雨が降るという感覚の方が自然である。あるいは雨後に、霧のような雲が東の山々に立ちこめる幻想的な光景もよく見られる。それは、東の山々から雲が立ち上り、小雨を降らせるように見えなくもない。こうした実感からいっても、南のミハ山とする論拠には疑問を感じるといわねばならない。

次に、（4）ミハ山の背後の山々が垣のような山（「三垣の山」）と考えられることについてである。ミカキ山という固有名称は史料に見出せず、筆者もミカキを御垣の意と捉えてはいるが、カムナビ山に「立向三垣乃山（たちむかふみかきのやま）」（9一七六一）とあることは重要ではないだろうか。岸説では、ミハ山の後方にそびえる山々を比定するが、それでは「立ち向かふ」というイメージが湧かないのである。これについても諸説分かれているが、カムナビ山がどこに比定されるかによって異なるのが現状である。従って、まずは当面の問題であるカムナビ山をどこととらえるかを中心に考えを進めたい。

なお、天理砂岩による石垣の痕跡が、かつて天神山と呼ばれた酒船石遺跡のある丘陵の中腹から発見され、斉明天皇時代の「天宮」「両槻宮」であり、これがミカキの山である可能性も指摘されている。[12]

最後に、（5）「嶋宮」に近い山であることが論拠とされている点について考えておきたい。これは、①の赤人歌が平城遷都後の歌であることも踏まえつつ、次の歌に詠まれた地名を勘案した結果であるという。

④　帛叫（みてぐらを）　楢従出而（ならよりいでて）　水蓼（みづたで）　穂積至（ほづみにいたり）　鳥網張（となみはる）　坂手乎過（さかてをすぎ）
石走（いはばしる）甘南備山丹（かむなびやまに）　朝宮（あさみやに）　仕奉而（つかへまつりて）　吉野部登（よしのへと）　入座見者（いりますみれば）
古所念（いにしへおもほゆ）　（13三二三〇）

反歌

月日（つきもひも）　攝友（かはりゆけども）　久経流（ひさにふる）　三諸之山（みもろのやまの）　礪津宮地（とつみやところ）（13三二三一）

右二首。但、或本歌曰、故王都跡津宮地也

奈良を出発点とすることからいっても、④は奈良時代の歌であるとみられる。穂積・坂手を経てカムナビ山に至り、吉野に入る行程が詠まれていることから、先のミハ山が中ツ道の延長線上であることを重視して、これらが中ツ道に近い場所を詠み込んでいるとの指摘もされた。しかし、少なくとも飛鳥宮跡周辺地域においては、南北の延長線が重視されていないことは前述のとおりである。

反歌には「三諸之山（みもろのやまの）　礪津宮地（とつみやところ）」とあり、これが奈良時代に存続していた記録がある小治田宮か嶋宮ではないかとされ、ミハ山にもほど近いことから嶋宮が想定されたようである。

しかし、奈良時代に存続した宮は、小治田宮と嶋宮だけではなく、後述するように飛鳥浄御原宮もまたある程度は存続していた可能性がある。

（C）説は、さらに西宮一民氏が補強したことによって、文学研究者にも定着したといえる。西宮氏は次のように万葉歌から条件を抽出し、いずれにも合致することを指摘した。[13]

（ア）「明日香」の地域を全体的に展望しうる位置にあること―3三二四

（イ）飛鳥川があたかも神名火山の帯であるかのようにその麓を流れていること―13三三〇三

（ウ）里に近いこと―7一一二五、13三三〇三

（エ）自然地理に適うこと―13三二六八、9一七六一

（オ）近くに離宮があること―13三二三〇、三二三一

さらに、三二三〇番歌の「石走」を「イシバシノ」と訓読し、巻七・一一二五、一一二六番歌に拠って、人工的な飛び石であるイシバシは上流に求められると指摘した。

「ミハ山」すなはち「神なび山」に向つて、飛鳥川には「石橋」が渡されてゐたので、「石橋の神なび山」といふ枕詞になったといふのが私の新説である。その「石橋」は主に橋の里（飛鳥川西岸）と祝戸・島庄・岡の里（飛鳥川東岸）とを連ねるものであった。これらの里が「神なびの里」といはれる所であつた。

しかし、西宮氏の指摘したように「石走」を、イシバシと訓読したとしても、「石橋」が渡された地を「神なびの里」と称するのは迂遠ではないだろうか。さらにいえば、石橋が橋と各集落とを結ぶ橋であったという明確な根拠はない。

（ア）～（オ）に掲げられた条件は、宮を大字岡の飛鳥浄御原宮跡とみれば、（C）説だけではなく（B）（D）（E）の説にも該当する。

明日香村大字島庄の嶋宮ばかりが注目されてきたが、近年の発掘調査により、明日香村大字岡の飛鳥京跡では、四期に亘る遺構が検

出され、舒明天皇から持統天皇までの歴代の飛鳥諸宮が営まれた地であったことが明らかにされている。

さらに、宮内の苑池遺構は、七世紀中頃に造営され、天武・持統天皇代に整備され、少なくとも九世紀頃まで機能していたことがわかっている。[14]

飛鳥時代以降も当地を人々が行き来したようである。嶋宮や小治田宮だけでなく、大字岡の飛鳥浄御原宮跡も何らかの形で存続していた可能性は否定できないと考える。

【（D）説について】

次に、（D）岡寺山説についてであるが、これまで挙げられてきた（1）～（5）、（ア）～（オ）の条件にも合致する。

集中のタチムカフという用例（1六一、2一九九、二三〇、9一八〇九、10一九三七、19四一七七）をみると、いずれも対象に相対することをあらわしていることから、相対する位置関係にある山を考えたい。すると、飛鳥宮跡を挟んで向かい合う甘樫丘と香具山から続く岡寺山の山並みが注目される。飛鳥川下流から見ると、甘樫丘が飛鳥宮跡を守るミカキノ山と表現されたと見ることも可能ではある。

古代の岡寺の寺域であったと考えられている現在の治田神社境内から、奈良時代のものとみられる基壇などが検出されている。[15]岡寺山という名称が、岡寺建立後の命名であろうことを考えると、前掲の『日本紀略』淳和天皇天長六（八二九）年三月条「己丑（十日）、大和国高市郡賀美郷甘南備山飛鳥社、遷同郡同郷鳥形山、依神託宣也」にみえる「甘南備山」であった可能性も考えられる。飛鳥宮跡の東にそびえる山という点からいっても、神聖視されるに相応しいように思われる。むしろそうした山であったからこそ、遷都後に寺院が建立されたのかもしれない。

この（D）説が一般化しなかったのは、論拠とされた点のほとんどが現代の民俗事例に拠るものであったことが大きいのではないかと思われる。事実、当該論文の主眼は、掲載書名が示すとおり「飛鳥の祭りと伝承」について述べることであった。しかも、論拠のひとつは「神奈備の宮」を嶋宮とみる岸説に負うてもおり、岸説を否定するまでに至らなかったものと思われる。

【（E）説について】

続いて（E）天神山説について触れておく。

菊地氏は、飛鳥という大字名の残る地域こそが「アスカの地霊が宿り、神々が降臨する聖地であり、アスカの里のなかでも「神奈備の里」と呼ぶにふさわしいところであった」とする。

先掲の『日本略記』の遷座の記述と、元禄十一年（一六九八）の「大和国飛鳥社図」において、天神山が飛鳥坐神社の御旅所と記されていることや、現在は飛鳥坐神社境内にある飛鳥山口坐神社がみ

えないことなどを指摘したうえで、天神山をかつて飛鳥水分神社のあった場所としてとらえ、細川山、岡寺山、天神山と連なって里に張り出す地形に着目し、その山並みがアスカの聖なる存在であったとみている。

確かに、『三代実録』においても、「飛鳥神」と「飛鳥山口神」とは別に記載されている。

庚申。山城國月讀神。木嶋神。羽束志神。水主神。樺井神。和岐神。大和國大和神。石上神。大神神。一言主神。片岡神。廣瀬神。龍田神。巨勢山口神。葛木水分神。賀茂山口神。當麻山口神。大坂山口神。膽駒山口神。石村山口神。耳成山口神。養父山口神。都祁山口神。都祁水分神。長谷山口神。忍坂山口神。宇陀水分神。飛鳥神。飛鳥山口神。畝火山口神。吉野山口神。吉野水分神。丹生川上神。河内國枚岡神。恩智神。和泉國大鳥神。攝津國住吉神。大依羅神。難波大社神。廣田神。生田神。長田神。新屋神。垂水神。名次神等遣使奉幣。爲風雨祈焉。

（『三代実録』巻三貞観元年（八五九）九月八日）

なお、天神山とは、万葉文化館の目と鼻の先である酒船石遺跡一帯である。先述のように、中腹からは斉明天皇時代の天理砂岩の石垣が見つかっており、「天宮」とされた地である可能性がある。酒船石遺跡には、旧来の「酒船石」だけでなく、「亀型石槽」なども含まれる。石で囲まれた独特の空間であり、地下水の導水施設を伴う、水の祭祀を行った場所である可能性が考えられている。[16]

そうした点で聖なる地という意味では相応しいが、カムナビ山そのものであったかどうかは不明である。

また、カムナビ山の必須条件である、山に沿って流れるカムナビ川の存在が希薄であるといわねばならない。飛鳥のカムナビ川といえば飛鳥川である、という共通認識が崩れない限り、他の説に比べて分が悪いと思われる。

【（F）説について】

最後に、（F）南淵山説について述べる。

桜井満氏は、岸俊男氏の（C）説を批判して、はじめはミハ山・岡寺山・南淵山の「三遷説」の可能性を提起した。[17]その後、「飛鳥の神奈備山」（『美夫君志』四一号）において、南淵山説を提唱した。

論拠には、やはり『日本略記』記載の飛鳥坐神社遷座記事が挙げられている。さらにその「飛鳥の神奈備」を「出雲国造神賀詞」のカヤナルミノミコトを祀る地と同一とみなし、「神のいます聖なる山には聖水が帯をなして流れるという発想」があることを指摘した。

乃大穴持命乃申給久、皇御孫命乃静坐牟大倭国申天、己命和魂乎、八咫鏡爾取託天、倭大物主櫛厳玉命登名乎称天、大御和乃神奈備爾坐、己命乃御子阿遅須伎高孫根乃命乃御魂乎、葛木乃鴨能神奈備爾坐、事代主命能御魂乎、宇奈提爾坐、賀夜奈流美命能御魂乎、飛鳥乃神奈備爾坐天、皇孫命能近守神登貢置天、八百丹杵築宮爾静坐支。

（出雲国造神賀詞）

ここにいう「賀夜奈流美命」とは、『三代実録』にも記載があることが指摘され、「飛鳥社」が祈雨の神として祭られていたとする。

廿七日甲申。京畿七道諸神進階及新叙。惣二百六十七社。（中略）正四位下丹生川上雨師神従三位。従五位下賀夜奈流美神正四位下。従五位下勳八等穴師兵主神。片岡神。夜岐布山口神並正五位上。従五位下都祁水分神。都祁山口神。石寸山口神。耳成山口神。飛鳥山口神。畝火山口神。長谷山口神。忍坂山口神。宇陀水分神。吉野水分神。吉野山口神。巨勢山口神。葛木水分神。鴨山口神。當麻山口神。大坂山口神。伊古麻山口神並正五位下。従五位下和爾赤坂彦神。山邊御縣神。村屋祢富都比賣神。池坐朝霧黄幡比賣神。鏡作天照御魂神。十市御縣神。目原高御魂神。畝尾建土安神。子部神。天香山大麻等野知神。宗我都比古神。甘樫神。（後略）

（『三代実録』貞観元（八五九）年正月二七日）

『類聚三代格』の記述をみても、カヤナルミ神は水にまつわる神であるらしい。

太政官符、応以大社封戸修理小社事、其祖神者貴而有封、其裔神則微而無封、仮令飛鳥神之裔、天太玉・櫛玉・臼滝・賀屋鳴比女四神此等之類是矣。

（『類聚三代格』貞観一六年（八七四）六月二八日）

それらとともに、皇極天皇が六四二年に「南淵の河上」において祈雨祭を行ったことに着目し、南淵山こそが飛鳥のカムナビ山であったと結論する。

ただし、『延喜式』には「飛鳥坐神社」とは別に「加夜奈流美神社」が明記されていることからみて、飛鳥のカムナビが「賀夜奈流美神」を祭っていた地であるという確証はない。

そしてもっとも問題なのは、古代飛鳥の範囲を「賀美郷」の範囲と同一視している点である。

飛鳥に歴代の王宮が営まれたのは、六世紀末～七世紀末の約百年間であり、飛鳥と称される地域はごく限られた地であったと考えられる。[18] 南淵山は奥明日香に位置していることから、神聖な山では

あったとしても、万葉歌①～④の表現に合致するカムナビ山とはみなし難いと考える。

三　宮とカムナビ山の関係

結局のところ、飛鳥のカムナビ山と詠まれた山がどこにあたるのかという（A）～（F）説はいずれも、天武天皇時代の歌に関していえば飛鳥浄御原宮がどこであったかが重要であり、奈良時代の歌でいえば飛鳥の「離宮」がどこであったかが重要な問題となる、といえる。

そこで次に、宮とカムナビ山との関係について考えておきたい。

⑤　天皇崩之時大后御作歌一首

八隅知之　我大王之　暮去者　召賜良之　明来者　問賜良志
……神岳乃……山之黄葉乎　今日毛鴨　問給麻思　明日毛鴨
召賜萬旨　其山乎　振放見乍　暮去者　綾哀　明来者
裏佐備晩　荒妙乃　衣之袖者　乾時文無　（2一五九）

一書曰天皇崩之時太上天皇御製歌二首

燃火物　取而裹而　福路庭　入澄不言八面　智男雲
向南山　陳雲之　青雲之　星離去　月矣離而　（2一六〇）
（2一六一）

この歌に詠まれた「神岳」も、①②③④に詠まれたカムナビ山であると考えられている。そうであれば、飛鳥のカムナビ山とは、天武天皇が生前に朝な夕な眺めた山でもあったということができる。

そこで筆者にはもうひとつ気になる場所がある。それは大字川原の川原寺北方にある川原寺裏山である。

一見すると、甘樫丘の一部にも見えるが、間には古道もあったらしく独立しており、丘の頂上には現在「板蓋神社」が祀られている。

板蓋神社（明日香村大字川原字宮山）

當社の創建は年代詳かならず、現今社名に板蓋を冠せる所以は、蓋し何れの時よりか當社頭を以て、古の飛鳥板蓋宮址に擬定せしによれる歟。（高市郡教育会『高市郡神社誌』大正十一年）

今は近世の物とみられる灯籠などが残る程度で、古代にまで遡れる史料はない。

しかしながら、この麓には「川原寺北方遺跡」が広がっていたようである。網干善教氏によって、ここで九世紀頃に焼亡した川原寺の遺物が「埋納」されていたことが確認されている。[19]

『続日本紀』には、斉明天皇元年（六五五年）に「飛鳥川原宮」に遷居し、同七年（六六一年）に天皇が崩御して、「飛鳥川原」に

て殯したと記されている。川原寺創建の正確な年次は不明であるが、斉明天皇崩後、近江大津宮遷都（六六七年）までの間に、亡き母の冥福を祈るために天智天皇が発願したと考えられている。[20] その後、九世紀にもいくつかの記事がみえ、八三五～九〇九年の間に、火災により川原寺は焼亡したとみられている。

焼亡とはいえ塼仏や仏像の一部が当該遺跡から出土しており、網干論文によれば、廃棄されたというべきではなく、丁寧に「埋納」されていたという。少なくとも当地はそれにしかるべき場所であったと理解してよいだろう。

東西を貫く古道がこの南側を走っている。飛鳥の中心部では、飛鳥寺や飛鳥宮周辺で道路跡が発掘されており、特に川原寺と橘寺との間では幅一二mの東西道路が見つかっている。この道路を境界として、南は「橘」、北は「川原」「飛鳥」という地域名であった可能性が高い。

しかも、②に詠まれたように「三諸之（みもろの）　神奈備山従（かむなびやまゆ）　登能陰（とのぐもり）　雨者落来奴（あめはふりきぬ）」という実感からいえば、宮の西側に位置する丘である可能性を捨てきれない。旧説において甘樫丘説を再評価したのも、そうした西から天気が変わる点を考慮した結果であった。

さらにいえば、斉明朝に造営され、天武朝に整備されて、一〇世紀まで機能していたとみられる「飛鳥宮跡苑池遺構」からは、この丘が目の前に迫って見える。苑池の中島から振り返って岡寺山を見ると、東側には思いの外高低差があってよく見えない。

⑤の天武挽歌の表現を重視するならば、そしてそれが宮の中でもことに苑池を起点にする場合が考えられるとすれば、検討の余地があるようにも思われる。

ただし、苑池の東側の段丘上にも何らかの建物跡と見られる痕跡が検出されているので、こちらが天武天皇が朝に夕に眺めた宮内の施設であった可能性もある。現時点では、筆者は（D）岡寺山説かこの川原寺北方の丘か、いずれとも決めかねている。

また、飛鳥のカムナビ山が、「大和」という地名のように、時代によって指し示す場所が変遷した可能性もゼロではないだろう。

今後、周辺地域の発掘調査がさらに進めば、より多くの情報が得られ、また新たな見解が生まれる可能性もあるといえよう。

四　大君は神にしませば

ここまでは、いわば考古学の成果が文学研究に与えた影響の大きさを肯定的に踏まえたケースであった。しかし一方では、ひとしなみに考古学的な成果で文学研究の成果が書き換えられるわけではないとも考えている。

従来、飛鳥浄御原宮と関わりが深いと考えられてきた歌に、次の二首がある。

⑥　壬申年之乱平定以後歌二首

皇者　神尓之座者　赤駒之　腹婆布田為乎　京師跡奈之都

右一首大将軍贈右大臣大伴卿作　（19四二六〇）

大王者　神尓之座者　水鳥乃　須太久水奴麻乎　皇都常成通

［作者未詳］　（19四二六一）

右件二首、天平勝寶四年二月二日聞之、即載於茲也。

はじめに述べたように、これらの歌について、岸説において藤原京との関わりが指摘され、現在ではその後の発掘調査によって、よりその説が強化されているといえる。

岸説では、真神原が「赤駒之　腹婆布田為」や「水鳥乃　須太久水奴麻」といえるかとの疑問を呈し、「京師」「皇都」というミヤコの表記から、宮と京を区別した意識があると判断して、京域の成立した藤原京を想定した。京域は低湿地であったとみられることからも、この二首が「壬申の乱」を平定した天武天皇の計画した新京を詠んだ歌と理解されるようになったといえよう。

しかし、本稿でみてきた①～④の歌々が、奈良時代に飛鳥を追慕した歌であったことを忘れてはならないのではないか。

上野誠氏は、飛鳥が「フルサト」として、奈良時代に「天武皇統の始発の聖地」と認識されていたことについて論じ、そこに「フリニシサト」との表現性の違いがあることを指摘されている。[21] さらに、『万葉集』の用例から分析する限り、カムナビの信仰とは、「藤原京までに捨てられた旧型の信仰・思想」であるとも結論されている。[22]

⑥の二首が、六七二年の壬申の乱から八十年後の天平勝寶四年（七五二）に記録されたとあることも極めて重要である。左注に明らかにされているとおり、この時に聞いて載せたのであり、岸説が指摘した「京師」「皇都」という表記は、書き記されたこの時点の表記意識であるといえよう。

なお、同年四月には、東大寺大仏開眼会が盛大に行われ、五節舞や久米舞その他の歌舞も奉納されたという。退位したとはいえ、聖武天皇の発願になる大事業の一応の完成をみた年であり、大伴家持が、大伴氏の来歴と天武皇統始発の聖地を懐古するに相応しい時期

であるようにも思われる。

さらに重要なのは、二首に共通する「大君は神にしませば」という慣用表現が、天武・持統朝に特徴的な表現である点である。

この表現は、神の中の神として人に超越する「大君」を描き天皇を称えたものと考えられる。[23] これらの歌の表現とは、人に超越する「大君」を描くことに眼目があるのであり、むしろ人為では成し得ない偉業であればあるほど「大君は神にしませば」という表現が生きることになる。

岸説の指摘する、真神原が「赤駒之（あかこまの）　腹婆布田為（はらばふたため）」や「水鳥乃（みづとりの）須太久水奴麻（すだくみぬま）」といえず、藤原京域には湿地帯がある、という実際の土地の様子とは、いわば無関係なのである。

念のために申し添えるが、これは考古学の成果を否定するということではない。『万葉集』中における当該表現の用例のすべてが、人為では成し得ない描写を伴うとも言い切れない。そこには、時代的な表現の意味の変遷も考慮されるべきかと考える。しかしあくまでも、万葉歌を理解する際には、まずは表現の意図を重視すべきであるということにはかわりない。

『万葉集』において、飛鳥のカムナビが、旧型の信仰であったにも関わらず奈良時代に追慕され歌に詠まれたことと、八十年後に天武天皇の壬申の乱平定の偉業が称えられた歌が記録されたこととは、軌を一にする現象と考えられる。

ひとくちに八十年というが、現代人にとってもそれは隔世の感があり、実体験ではなく歴史上の事柄を知識として伝えることになるのではないだろうか。まして平均寿命も短く、現代のような記録媒体もない古代においては、一つの画期として伝説的に記憶されていた可能性があるのではないか。

そしてそれは、⑤に詠まれていたように、天武天皇が朝な夕な見つめた山にも近い宮である必要があった。現代の歴史学や考古学においては、天武天皇の偉業といえば藤原京を真っ先に考えることが正しいとしても、『万葉集』においては、天武皇統の始発の地として認識され表現されていた場所であり、「大君は神にしませば」と称えるに相応しい場所であるのは、やはり「飛鳥」であったと考えられる。

五　おわりに

以上のように、飛鳥の宮処とカムナビ山について、従来の諸説について考古学の成果を援用しつつ考察し、現時点での管見を述べた。それを踏まえて、「大君は神にしませば」という表現の意図と、現在有力視されている藤原京説の根本的な問題点についても言及した。

考古学や歴史学の知見を援用しつつも、文学の研究はそれらの学問と目的を異にする。文学として表現された内容には、当時の環境

や生活実感が反映するとはいえ、そこから客観的な「史実」を導き出すことは困難である。「史実」を明らかにすることを目的とする考古学や歴史学と、そうした「表現」そのものの意味や位置づけを明らかにしようとし、必ずしも「史実」を問うわけではない文学研究とは、扱う時代や史料が重なるものの、研究方法も目指すところも異なっているというほかない。

こと古代文学に関する限りは、現存資料が少なく、言葉の盲信や、現代人による勝手な古代の理想化をしがちであることは否めない。それを検証するためには、歴史学や考古学などの隣接諸分野の学術成果を援用する必要がある。しかしながら、文学研究においては、なぜそのように表現されたかを問題にはできても、表現された内容を現実とイコールで結ぶことはできず、むしろそうした先入観を持つことには禁欲的であるべきだとも考えている。

そうした、問題設定や資料活用の位相が異なることを弁える限り、古代文学の学際的な研究の有用性は今後より一層高まると考えられる。万葉文化館における学際的な研究が目指すところもそこにある、と認識している。

［注］

（1）拙稿「鳴く鹿を詠む歌―詠物長歌の位相―」『美夫君志』七十一号、二〇〇六年二月

（2）直木孝次郎『飛鳥―その光と影―』吉川弘文館、一九九〇年

（3）坂本太郎ほか校注『日本書紀（下）』日本古典文学大系（岩波書店、一九六五年七月）当該記事頭注

（4）小島憲之ほか校注『日本書紀③』新編日本古典文学全集（小学館、一九九八年六月）当該記事頭注

（5）豊島直博「甘樫丘東麓遺跡の調査―151・157次」『奈良文化財研究所紀要2009』二〇〇九年七月

（6）岸俊男「万葉歌の歴史的背景」『宮都と木簡―よみがえる古代史―』吉川弘文館、昭和五二〈一九七七〉年一〇月［初出：昭和四六〈一九七一〉・九）］

（7）神野恵・飛田恵美子「雷丘の調査―第139次」『奈良文化財研究所紀要2006』二〇〇六年六月

（8）小澤毅「小墾田宮・飛鳥宮・嶋宮―七世紀の飛鳥地域における宮都空間の形成―」『奈良国立文化財研究所編　文化財論叢Ⅱ』一九九五年

（9）「橘寺智識」（野中寺弥勒像銘文・天智天皇五〈六六六〉年）や「橘寺の尼房に失火して十房を焼く」（『日本書紀』天武天皇九〈六八〇〉年四月条）という記述から、「橘」という地域名に由来する

とみられる「橘寺」が、少なくとも七世紀中頃には創建している。

（10）「川原下ノ茶屋遺跡」『続明日香村史（上巻）』明日香村、二〇〇六年

（11）かつて『万葉集』における「沫雪（アハユキ）」と「淡雪（アワユキ）」の書き分けに関連して、奈良時代にハとワの混同がないことを指摘した。（拙著「『物色』の倭製」『万葉古代学研究所年報』一号・二〇〇三年三月）

（12）桜井満「飛鳥の風土―飛鳥の川と神奈備の山―」『飛鳥の祭りと伝承―古典と民俗学叢書12―』桜楓社、平成元〈一九八九〉年二月

（13）西宮一民「飛鳥の神なび」『美夫君志』二〇号、昭和五一（一九七六）年七月

（14）『史跡・名勝　飛鳥京跡苑池（1）―飛鳥京跡Ⅴ―』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第一一一冊、二〇一二年三月

（15）「飛鳥京跡第84次調査概要」『奈良県遺跡調査概報〈一九八二年度第一分冊〉』一九八三年

（16）『酒船石遺跡発掘調査報告書―付・飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡―』明日香村教育委員会文化財課、二〇〇六年三月

（17）注12に同じ。

（18）注8に同じ。

（19）網干善教「飛鳥川原寺裏山遺跡と出土遺物」『佛教藝術』九九号、一九七四年一一月

（20）福山敏男「川原寺」『奈良朝寺院の研究』一九四八年

（21）上野誠「万葉語「フルサト」の位相」「故郷・飛鳥思慕の文芸」『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼―』雄山閣、一九九七年十一月

（22）上野誠「古代宮都とカムナビ」『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼―』雄山閣、一九九七年十一月

（23）遠山一郎「「大君は神にしませば」を共有する歌」『天皇神話の形成と万葉集』塙書房、一九九八年一月